

未来の人々は我々のことを何と思うだろうか。ロジャー・ウィリアムズがマサチューセッツ・インディアナについて言ったように、人間の心をもった狼だと言うだろうか？ 我々は人間性を放棄したと思うだろうか？ 彼らにはそう言う権利がある。

C・P・スノウ

我々は人間として二つの大きな衝動を内に秘めていると、私は思う。ひとつは生に参加すること。それは生命を授けることで終わる。もうひとつは死を避けること。それは死を授けることで悲劇的に終わる。生と死は我々の権限のうちにあり、我々は生を活性化することもできるし、死を活性化することもできる。

ギル・エリオット

第十八章 トリニティ（三位一体）

トルーマン新大統領と二人の補佐官

フランクリン・ルーズベルトの死後二十四時間たぬうちに、二人の人物が、ハリー・トルーマンに原子爆弾のことを話した。はじめに話したのは、すらりとした、白髪の、著名な陸軍長官ヘンリー・ルイス・スチムソンだった。彼は、ルーズベルトが亡くなった日の夕方、トルーマンが就任宣誓後に招集した短い閣議のあと、その宣誓をしたばかりの大統領に話した。トルーマンが回想録に報じている。

「スチムソンは私に、進行中の巨大なプロジェクトについて知っておいてもらいたい、それは、ほとんど信じられないような破壊力をもった新しい爆弾の開発を目指すものだ、と言った。それが、そのとき彼が自由に言えたすべてだった。彼の言ったことは私を当惑させた。それが原子爆弾について私にもたらされた最初の情報であったが、詳しいことについては彼は何も知らせてくれなかった」

トルーマンは、戦時の上院の国防計画調査委員会の委員長として仕事して以来マンハッタン計画の存在を知ってはいた。そのとき彼は、費用のかかる秘密プロジェクトの目的を詮索して、ほかならぬ陸軍長官自身に肘鉄を食らっていたのである。番犬的責任感とブルドッグ的頑健さをもった上院議員が、莫大な費用のかかる軍需プラント建設の調査を、スチムソンの言葉だけで放棄したということは、長官の評判がどのようなものであったかを物語っている。